基本フレームは4寸角4mの規格材のみ

小さな木の軽やかな構造　少子高齢化・林業再生に対応

基本フレームは丸太梁以外、すべて4寸角・4mの規格材

大工の手で間伐材を活用

「新伝統工法」

上の写真はオール県産ヒノキによる木の家。基本フレームをすべて、120㎜角4mの規格材で組んでいる。三浦創建（長野県塩尻市☎0263・52・6117）の標準的なつくり方。大梁や構造用面材を用いず、2つ以上の部材を重ね合わせたり格子状に組み合わせたりして、必要な耐力や剛性を確保する。

たとえば、同社が「桁固め」と呼ぶ手法。上下2段に架け渡した梁を幕板（30×120㎜）を介して連結、ダボを打ち込んで縫いつける。梁間が短い場合は、下段の梁を通し貫（30×120㎜）にすることも可。一つひとつの断面は小さくても、3つの部材を合成することで、大梁と同等の荷重に耐えられるしくみだ。

「4寸角梁（桁）＋幕板＋受け梁」をダボで縫い付けた「桁固め」

4寸角梁を相欠きで格子状に組むことで床剛性を確保する

同社のつくり方をマニュアル的にまとめた「新伝統構法の紹介」

同じことは柱の足元でも行い、この場合は「土台＋幕板＋通し貫」という構成。桁固めに対し「足固め」と呼ぶ。これらは柱頭・柱脚を拘束するため、フレーム自体が強固に。「壁がなくても軸組だけである程度もたせることができる」と社長の三浦保男さんはいう。

こうした部材の合成は床面の補強にも応用。8畳間程度の空間であれば角梁を相欠きで格子状に組み、欠損を補うため上木の下端に60×120㎜の材を取り付ける。格子のピッチは910㎜。厚物合板や火打ち・金物などを用いずに床剛性を確保する。

小さな部材を使うのは、人工林ヒノキの間伐材需要を増やそうというねらいが一つ。部材寸法を統一することで使いまわしを効かせ、ストック乾燥を可能にする。断面が小さいため乾くのも早い。そのなかで大工の仕事を最大につくり出そうという考えだ。

同社の大工手間は坪あたり10人工。だが、材料費や経費のロスを省くことでトータルの建築単価を坪約60万円に抑えている。「効率的な方法を自ら考え、仕事を生み出し、技能の伝承につなげていきたい」とする。